

7月1日 布目湖オムラサキ蝶 第3回放蝶会実施！！

主催：布目湖オムラサキ蝶の自生を目指す会の皆様



放蝶の準備



放蝶！

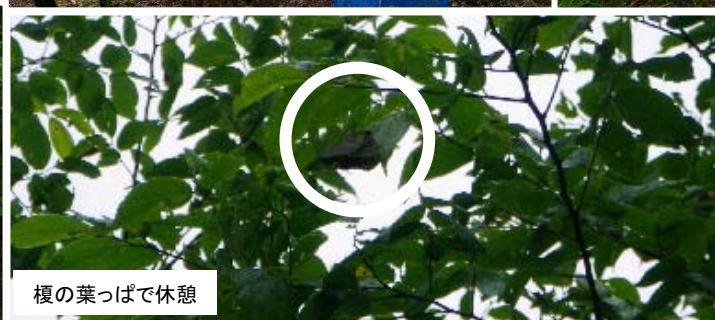


ちょっと休憩



元気で！

写真はご本人の了解を得て掲載しています。



榎の葉っぱで休憩

直前までの大雨でしたが、放蝶のタイミングでピタリと止みました。

今年のオムラサキはすごく元気で、あっという間に飛び立っていきました！

2ページ目もあるよ！

布目湖オオムラサキ蝶の自生を目指す会

第3回放蝶会

日時：平成24年7月1日（日）午前11時より

布目ダム湖は平成4年に竣工されました。その頃「日本における代表的な大型美麗種」である国蝶オオムラサキが準絶滅危惧種に指定されていることをラジオ放送で聞きました。オオムラサキは榎(エノキ)の葉のみを食性とする、里山の開発で榎の数が減少していることを知りました。

そこで、オオムラサキが自生できるような榎の森を湖畔の空き地に作るため、自宅の庭で芽を出した榎を身丈ほどに育て、毎年数本ずつ植樹してきました。放蝶場所には17本の榎があり、ようやく森らしくなりましたので、『自生』してくれることを希望して、一昨年7月に初めて30匹ほど（正しくは頭で数える）のオオムラサキの放蝶を行いました。今年度で3回目です。

榎(エノキ)は落葉高木で、ケヤキの模範材として家具などにも使われ、古くは旅の一里塚の木とも呼ばれ、里山では親しみのある木でした。榎の葉は卵状楕円形であるが左右が少し非対称である。大きな特徴は支脈が直線的に縁に向けて広がるのではなく、縁に沿うように葉先へ流れることです。葉肉は薄いですが硬質です。表面には光沢があり、裏面にはザラザラした感触があります。

オオムラサキ蝶は1年に一度7月前後に200個ほどの卵を葉の表に生みます。1週間ほどで孵化して1齢幼虫になります。緑色の幼虫は脱皮を繰り返して大きくなり秋には枯葉色に変化し、3齢か4齢幼虫で木から地面に降り、落葉の下で越冬します。

翌年3月下旬には幼虫は動きだし、榎の幹を登り、新芽が出てくるのを待ちます。5月下旬には5、6齢で5-6cmほどの終齢幼虫になり、6月になれば蛹になり始めます。2週間ほどで羽化し蝶になり、クヌギなどの樹液や腐った果実を餌にします。自然界では1ヶ月ほどで一生涯を終えます。

放蝶会のためのオオムラサキ飼育：昨年は我々の小さな飼育ケージでは餌である榎の葉が食べつくされる事態になり、10匹ほどの幼虫がかろうじて蛹化し、羽化しましたが、産卵は見られず幼虫が全くいない状態になりました。今年も3月下旬に秋山昭士氏（榎原市）から60匹ほどの幼虫を貰いました。4月上旬から活発に葉を食べ始めましたが、4cm、5cm、6cmと成長するにつけて、食べる葉の量が次第に多くなりました。今年は、あらかじめ準備した鉢植えの榎をケージ内へ順次搬入して葉を補給しましたので、30頭ほどの蝶が激しく羽ばたくようになりました。

上記秋山昭士氏はオオムラサキの飼育家で国営飛鳥公苑甘樫丘オオムラサキ放蝶会の講師を勤めておられます。また、郡山南幼稚園児に命を大切にする情操教育の一環としてオオムラサキ飼育を指導しておられる秦峰一氏（大和郡山市）にも飼育に関して色々助言をもらいました。



写真(左)はオオムラサキの雄。紫色の紋様が特徴。写真(右)は雌。羽の大きさは10cm程度。一般的には雌の方が大きい。(雄は去年の、雌は今年の飛鳥公苑甘樫丘放蝶会で撮影)